

Title	日本研究(早稲田大学日本学協会機関雑誌)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.167(339)- 169(341)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ご全面とも稱すべき基督教に關する記述を省略せるなども、此の傾向を裏書するものといふべきであらう。されど著者は唯物史觀に提はれたるに非ず、今篇よく自らの史觀を以て終始し、從來出でたる多くの邦人の西洋史文献と趣きを一にせざる所に本來の特色があり價值がある。更に本書を讀みて感ずる所は、著者の史眼に冷やかなること勁秋の如きものを藏する點である。峻切にして而かも深淵の趣きはあるが、歴史家の稍もすれば陥り易き感傷や同情は微塵もこれを認めることのない點である。之に依つて著者の史觀の公平なるを知る事が出来る。序論として上古よりの史學の變遷を述べられたのは、初學者の爲の便宜のみならず、著者自らの史學に對する態度を明らかにするに役立つものであらう。紹介必らずしも當を得ざるを知りつゝも、著者に心からなる敬意を表し本書を世に獎むる次第である。

(有賀春雄)

日本研究

(早稻田大學日本學協會機關雜誌)

早稻田大學の西村眞次教授を中心として此度新しく季刊雜誌「日本研究」が誕生したのは、吾人の衷心より慶賀に堪へぬ所である。百五十頁で挿繪、地圖等を豊富に載せ人類學、考古學、人文地理學、民俗學等の各方面の資料を網羅せんを努め、なか／＼抜目のない編輯振である。卷頭に「提唱」をして日本學協會の目的とする所を述べてをる。即ち、それによれば同會は「或は専門的に、或は非専門的に、祖國日本の文化を再吟味し、私達日本人が祖先

以來經過して來た過程を知り、其示標によつて現在及び當來の世界に於いて、私達自身の進むべき道を見出さうとする。私達はかうした意味の日本研究に取て「日本學」(Japanology)と命名した」

日本研究の必要に就ては吾人は双手を擧げて賛同する。然し果して「日本學」(Japanology)の命名は、時宜を得たものであらうか今までの用語例に従ふとエジプト學アッシリア學支那學等は、まづ考古學言語學よりその國の文化を檢討しはじめ、ついで總體の文化現象の精密な研究に及んでをる。是等の學問は、歐洲人にまつて最初は殆ど未知な領域であり、従つて之を呼ぶに包括的な名稱をもつてした。然し之は一時的であり、次第に研究の分野の分化して來るにつれて此名稱は妥當性を缺いて來る。日本人が支那研究に對しても支那學といふ名をあまり使用せず支那哲學、支那文學、支那史、支那社會史等の名稱でこれと呼んでをるのもその研究分野が専門化せるがためである。日本それ自身の研究に至つてはなほさらである。徳川時代に國學の名稱で指稱されたもの、今や國史、國語學、國文學、日本美術史、日本考古學と數へ切れぬ程に分化してをる。今さら未開文化に對する如くこの複雑な日本文化諸相の研究に日本學といふ名を日本人自らが與ふる必要があらうか。同提唱の中にはこう云つてをる。「私達のいはゆる日本學は、必ずしもエジプト學、アッシリア學、印度學の模倣ではなくて、私達、平生相寄り、相集まつて、祖國日本の文化展開を克明に研究してゐる人々、主として青年學徒が、これまでよりも一層眞面目に、一層協力的に、其研究を進めたいといふ希望で結合

した際に、其研究を統一する必要から名づけたまでのものである。私達の意圖では、手々に勝手な研究をするよりは同志の學徒が互に手を執り合ひ、聯絡を取つて、無駄のないやうに討究を進めるのが効果的であるといふので、研究の對象を日本、もつと嚴密に云へば日本文化と定め、研究の方法を人類學的、もつと精確に云へば文化人類學的と定め、ここにしたのである。文化人類學的方法とは、考古學的、工藝學的、社會學的、言語學的、土俗學的、五つの側面から文化を研究して、其研究結果を綜合して全幅的に文化の進化を知らうとするものである。私達の日本學は、結局文化人類學的方法を以て日本民衆の祖先以來の生活様式の進化過程を知らうとするものである、しかしながら、私達は何も如上の文化領域に其研究對象を封鎖しようとするものでなく、一例すれば日本の環境及び日本人の體質の地理的・人種的研究など、日本に關する限りもつと範圍を廣めることもあらうし、また近周民衆の文化に其研究の歩を進めることもあるべき筈で、あまりに嚴しき限界、あまりに窮屈な制約を其研究に設けないことにする。

からした意味から觀ると、私達の日本學は、日本文化史の研究に外ならぬ云々とした。

して見れば、本協會の主眼とする所は日本文化史の研究にある。その方法を從來の所謂史家の手段に依らず新しい最近流行の文化人類學的方法に訴へんとしたまでである。しからば、雜誌「日本研究」の目的とする所本誌のそれと極めて近似してをる。なにもことさらに「日本學」といふ名を冠せずとも歴史學といふ名目の本にその研究を統一せられるべきではなかつたらうか。弘く人類全體の

發展を知らうとする文化史的傾向は、近來の史學の世界的趨向である。日本文化の研究は、東洋史ひいては世界史の研究とまつてもきれない嚴密な關係にある。「日本研究」の發刊が機縁となつて將來西村教授傘下の青年學徒のみに止まらず歴史を誇る早稻田學園の史學諸科が大同團結して早稻田史學雜誌を創立し、もつて斯學興隆のために盡されんことを期待する。

卷頭の西村教授の「石敢當の研究」は、琉球に於ける資料を多くの圖版をもつて紹介されてをる。氏は石敢當をメンヒルの一つとなしてをられるが、普通私共はメンヒルを人類文化初期の産物と見てをる。石敢當は、起原はメンヒルであつたにしても之をメンヒルの部類の中に算へ入れるのは、かの支那の碑石をメンヒルの中に數へると同じたぐひで稍混同を招く嫌ひがある。同氏はついで石敢當に關する徳川時代の研究を述べ、古事記等をひいて「古代日本人の信じた石の遮止力」について説明し、最後に、沖繩の石敢當は、邪神の侵入防止以外に、生殖促進の呪力を發揮せしめようとする目的あり、かうした意味を有つた石敢當は、我邦にては「塞の神」と呼ばれてゐたから、日本から沖繩へ輸出されたものとすれば、サヘノカミの名稱が用ひられる筈であるのにそれらしい名さへ残つてゐない點から觀ると、沖繩の石敢當は、他から輸入されたと見なければならぬ。支那起原のものとするれば全部音讀してセキガントウと呼ぶべきであるのに、石だけを訓讀してイシガントといつてゐるから支那起原説も決して確かとは云へない。北西ポルトネオのオロンガヂュー説は、村落の外れに石を立て、パンガントーとよんでをる。如何にもよく似てゐるとはいつても差支ない。

事によると何らかの關係があるまいものでもない。支那の「石敢當」を沖繩のインガントウの起原であると主張すること、ちやうど同一程度の危さである。云々と述べてをられる。自分は日本と支那との石敢當の親縁關係は、ボルネオのパンガントーとの關係より數等密接だと考へる。西村教授は、二一頁に「肥後や薩摩には石敢當があつて、他國にはそのなかつた點から見ると、沖繩から我邦へ入つて來たもののやうにも思はれる」と云はれてをるが東北地方にも存在すること本誌餘白録に國分剛二氏の指摘せられた如くである。

その外今井濟二氏の「佐渡國分寺趾の研究」池上啓介氏の「東京府下玉川村堅穴住居趾群」、洞富雄氏の「信濃大町の借馬市」木村幹夫氏の「日本古墳の系統及び發達」(一)など有益な研究を滿載してゐる。洞氏の記文は、人文地理學上の好資料である。たゞその利用されてをる統計は村役場のものであるが、こゝにいふ數字はどれも實際に近いだらうか、役場の吏員の能力、科學的良心に現在の状態ではあまり信頼し難いのは遺憾である。是等の論文記事の多くは、西村教授に提出した學生のリポートだそうであるが、かゝる有望な學徒を多く門下に有する西村教授は幸福である。たゞし由來學生の書いたものにはまゝ出所のはつきりしないものが多くて困る。此號の「資料及報告」欄にかゝげた徐君報告の「朝鮮の土俗」の如きは、昭和二年東亞日報で元且の讀物として懸賞募集したもので、「朝鮮及朝鮮民族」(朝鮮思想通信社發行)の終りに轉載されてをる。(松本信廣)

日本文化史概論

(西村眞次著)
(東京堂發行)

國史全般に互る概論的敘述すらも、尙早の感なきを得ず考へられる今日に於て、日本文化史に於けるそれを課題とするといふことは、思ふに相當大なる學問的冒險であらう。この意味に於て西村眞次氏の『日本文化史概論』は先驅的使命を以て世に現はれたものといはなければならぬ。同氏は曩に『文化移動論』を公けにせられて文化の獨立起原説に反對するもの、様に思はれたが、本書に於ては徹頭徹尾これを貶黜し、「文化獨立起原説は一國の文化を其國で發生、生長、展開したと觀る考へ方でちよつと目には如何にも立派らしいけれど、實はけち臭い鳥國主義、慾張りの帝國主義の觀方であつて、其國家其民族其文化が世界に繋がつてゐることを見落してゐるものである。日本の國土は東半球の邊陲に位置してゐるけれど、そこは古代文化の湊合地點であり、日本の文化は島國內で異化したものだけれど、世界文化の粹を多く集めて居り、日本の民族は大方單式人種であると思はれてゐるけれども實は黒黃白の三大人種の混淆である。日本はかうして其出現以來世界的地位を占めて居り、決して全然孤立した國家ではなかつた。かう考へてこそ日本の世界史上に占める歴史的地位が高いものになつて來る」。といはれてゐる。このことは本書の全體系に對して重大なる關係を有するが故に長き引用を敢てしたのであるが、兎に角文化移動説は氏の信仰であるらしい。私は氏の文化史觀に於て再び長き引用を以て讀者を煩はさなければならぬ。かうした